教育総合センター
だより

ＮＯ．１６９
令和　５．９．１

「教員生活を振り返って」

尼崎市立武庫庄小学校
校長　　足立　靖

中学校から教員生活をスタートし、夜間中学校である琴城分校（現 成良中学校琴城分校)、そして小学校に勤務しました。

昼間の中学校では教科指導やクラブ活動に明け暮れ、20 数年を過ごしました。中でも、記憶に残るのが 1995 年の兵庫県南部地震。ちょうど上の娘が生まれた年でもありました。当時は中学３年生の担任で、進路の書類と格闘していた時、まさかこんなことになるなんて夢にも思いませんでした。校区内を回ると全壊半壊の家、道路もがれきで通れないところもたくさんありました。学校は避難所になり、生徒たちの安否確認や避難所の手伝いなど昼夜を問わず働きました。学校全体で団結してなんとか乗り切り、卒業式は運動場で行ったことを覚えています。

夜間中学校である琴城分校（きんじょうぶんこう）には教頭として勤務しました。当時、夜間中学校は兵庫県内で３校しかなく、神戸に 2 校、残りの 1 校が尼崎にある琴城分校でした。当時は、現在の尼崎市立歴史博物館の東隣に３階建ての白い建物があって、１階が児童ホームとこどもクラブで２・３階が琴城分校の教室となっていました。そこにはさまざまな社会的な背景を持つ生徒が通い、学んでいました。母語や国籍等の違いを越えて、共に生きる力を育む場所でした。年齢層は 10 代から 80 代。生徒たちの学ぶ意欲には圧倒されました。

その他、中学校の家庭科室を借りて食文化交流をしたり、小中学校との交流会も行ったりしました。大きなイベントとしては、近畿の夜間中学生が集まった運動会をベイコム体育館で行いました。

また、分校の耐震・老朽化に伴い、移転に向けての教室等の備品や内装設備について市教委と相談しながらとりまとめたことが最後の大仕事になりました。

この後、小学校へ勤務することになるのですが、夜間中学校から昼間の小学校へ転勤と聞いて、本当にわくわくしました。

当初は、自分が経験してきたことと何もかもが違って、戸惑いもありました。児童と接する先生方の様子を見ながら、毎日が発見と驚きの連続で、まるで別世界に入り込んだような感じでした。そんな中で、小学校の先生方が１年生の児童相手に、先生の方にきちんと体を向かせて話を聴かせている姿に大変感動しました。なんだ、そんなことと思われる方もあるかと思いますが､何事もまずそこから始まると思います。先生の言葉遣い、表情、目配りや雰囲気等、先生の姿そのものから、子どもたちは学び続けています。授業をのぞくと児童は真剣なまなざしで、生き生きと活動している姿をよく見かけます。学ぶということは、一歩前に進むことであると思います。未来ある児童の学びを守り、笑顔があふれる学校にしていくため、私自身学び続けていきたいと思います。

☆☆コミュニケーション重視の授業改善に向けた教員研修☆☆

１　目的と内容

学習指導要領では、互いの考えや気持ちなどを伝え合う対話的な言語活動を一層重視する観点から「話すこと［やり取り］」の領域が設定されています。言語の使用場面や働きを適切に取り上げ、言語材料と言語活動を効果的に関連付けて指導することなどの改善・充実が求められ、授業は英語で行うことを基本とすると明記されています。

令和４年度英語教育実施状況調査の結果では、「実際に英語を用いて互いの考えや気持ちを伝え合う」言語活動を授業の半分以上で行っていると回答した学校の割合（１）、英語担当教師が発話の半分以上を英語で行っている学校の割合（２）が表のようになっています。

	小学校	中学校	高等学校
（１）	89.2%	61.8%	63.8%
	91.9%	74.5%	52.9%
（２）	－	59.7%	52.8%
	－	74.4%	46.1%

（上段は兵庫県、下段は国の結果。）

生徒の英語力の向上には、「生徒の言語活動の割合」「英語教員の英語力や発話の割合」「ICT の活用（発表や話すことにおけるやり取りをする活動）」等が影響を与えている、と分析されており、この割合を高めることを求められています。

上記のことから本研修では、English Rich な授業づくりを目指します。教員が授業の中で英語を使い、生徒のモデルになるだけでなく、生徒が英語をたくさん使いコミュニケーションを行う授業です。British Council の講師が教員役となり実際の授業を想定したデモ授業を行い、受講者は学習者の立場で参加します。その後、体験したデモ授業の指導手順と指導スキルについて討議や分析をします。

そして、指導スキルを手順に従って練習をします。教員役、生徒役に分かれマイクロティーチング（小グループでの模擬指導）を行うことで、学んだスキルを授業で実践するための練習になるのです。研修と授業の往還を大切に、英語教員は年に３回、３時間半の研修を受講します。

２　受講者の声

○授業実践で悩んでいた内容の改善につなげることのできる授業でした。生徒の能動的な英語を使ったコミュニケーションを今回の研修での学びをもとに実現すべく、学校に戻って積極的に実践していきたいと思います。

○small talk の流れがイメージできたので、実際にテスト後にやってみたいと思いました。簡単な話題でも、生徒が楽しめそうな内容なので、導入でやってみたいです。

○目の前の生徒たちの学習習熟度にもよりますが、教師自身が明確に目標を立てて、授業をプランニングしていくべきだと再認識できる研修でした。

（研修の様子）

（学び支援課　指導主事　中村　匡孝）

☆☆AGSリーディング・プロジェクト校の取組について☆☆

＜はじめに＞

「未来の学び研究事業　先導的モデル校実証研究」として、AGSリーディング・プロジェクト校を募集する取組も本年度で３年目を迎えました。GIGAスクール構想で児童生徒に１人１台端末が配備されてから始まった取組であり、ICT機器を活用した先導的な取組（今年度は探究的な学習や複線型学習等にも拡大）を進めるプロジェクト校に需用費を支給することで、学校が独自に進める取組を支援し、その成果を授業公開や報告書等により、市内の学校に還元するといった内容となっています。

昨年度は、「立花小学校」「塚口小学校」「尼崎北小学校」「武庫中学校」「園田東中学校」が実践を行いました。

本年度は、「金楽寺小学校」「清和小学校」「わかば西小学校」「小園中学校」「園田東中学校」の5校が、取組を実践していく予定です。

〈昨年度の実績〉

【小学校】

・大型テレビとPCの無線で接続するミラーリング機能の検証

・デジタル教科書（算数）を活用した教育的効果の検証

ICT機器を活用して、授業を進めていくためには、模範となる回答や例示などを大型提示装置で映し出すことは必須と言えます。無線で投影することによって、教師は、自分や児童生徒の作成物をどの場所からでも投影できるため、授業効率が上がることが実証されました。また、本年度から、小学校と特別支援学校で導入される電子黒板においても、同様の機能がありますので、本検証をもとに、電子黒板の活用推進に役立つことが期待されます。

デジタル教科書は、令和６年度から、まずは外国語に導入され、その後、他教科へと展開される予定となっています。デジタル教科書を使用した場合、通常の教科書と比べて、問題を何度もやり直すことが容易であり、児童の思考がしやすくなるといったことがある反面、練習問題等を行うために、ICTの操作が必要となり、児童によっては直観的に取り扱うことが難しいこともあるという課題が上がりました。

【中学校】

・業務改善へとつながるICT機器使用の提案

・大型ディプレイの授業での活用提案

中学校での大型提示装置は、プロジェクターが整備されています。プロジェクターは、持ち運びが容易で、映像を大きく映し出すことができるなどのメリットがありますが、輝度が低いため、見えにくかったり、黒板を占有したりするなどのデメリットもあります。本検証によって、中学校においても、大型ディスプレイの利便性を確認することができました。また、職員室や教員控室に大型提示装置を置くことで、業務改善につながることも示されました。

＜本年度の予定＞

・児童の主体的な探究活動を行うことによる学びの質が深まる授業作り

・多様な子どもたちに対応した個別最適化となる授業作りのためのICT環境整備

・「主体的・対話的で深い学び」につなげるための自由進度学習の取組

・教員用デジタル教科書コンテンツ等の検証及び視覚教材等を有効活用した授業実践

・自動採点ソフトを活用した業務改善の検証及び結果分析機能を用いた、きめ細やかな指導

上記をテーマに各校で実践を行って頂きます。どのテーマも、ICT機器を有効に活用したものであり、今後の尼崎市のICT活用のモデルとなるものと考えます。２学期以降に授業公開をして頂く予定ですので、積極的にご参加ください。

＜おわりに＞

ICT機器は非常に便利なものです。昨今の社会問題になっている教職員の校務改善にも繋がります。また、児童生徒の「主体的、対話的で深い学び」につながる学習ツールとして大きく貢献します。使い始めは、時間がかかったり、思い通りのことができなかったりすると思いますが、使わなかったり、使い方を知らなかったりしたままであれば、今となにも変わりません。教職員の皆様がICTを主体的に活用して頂けるように、本事業と合わせて今後も、各校の好事例の提示や学校訪問による情報提供を行っていきます。

（学校ICT推進課　係長　山下　崇）

教育情報コーナーのお知らせ

☆教育情報コーナーのご案内

教育情報コーナーでは、先生方に利用していただきたい本や資料、雑誌等を整備しています。また、必要な図書、資料等のご相談にも応じております。お気軽にお尋ね下さい。

（３Ｆ　教育情報コーナー）

【新着図書】

・『教育書の生かし方　～読書による閃きを実践化する過程が、指導力を磨く！』
松村英治　著／東洋館出版社
・『「いのちの授業」をつくる』　鈴木中人・玉置　崇　著／さくら社
・『子どもが主役の学習評価』　ネットワーク編集委員会　編／学事出版
・『日本一短い「先生」への手紙』　公益財団法人丸岡文化財団編／中央経済社
・『教室マルトリートメント』　川上康則　著／東洋館出版社
・『学校安全のリデザイン　～災害、事件、事故から子どもたちを守るために』
宮田美恵子　著／学事出版
・『子どもの脳を傷つける親たち』　友田明美　著／ＮＨＫ出版
・『「組織のネコ」という働き方　～「組織のイヌ」に違和感がある人のための、成果を出し続けるヒント』
仲山進也　著／翔泳社

（担当　松浦）

☆「ひと咲きタワー」は、学びのタワー！

【本の紹介】

■『１０代と考える「スマホ」』岩波書店　2022年2月初版発行）

著者　竹内　和雄：兵庫県立大学　環境人間学部教授。公立中学校で２０年間、生徒指導を担当。寝屋川市教委指導主事を経て２０１２年より現職。いじめ、不登校、ネット問題、生徒会活動等を研究している。近年は、子どもとネットの諸課題解決のため、文部科学省、総務省、内閣府、ユニセフ等と協働している。NHK『視点・論点』『クローズアップ現代』等にも出演、２０１４年ウイーン大学客員研究員。

本の題名のとおり、著者が「スマホ」について、１０代向けに書いたものである。そのため、平易な表現で読みやすく、すぐに読めてしまうが、「一緒に考えよう」をコンセプトにしていることから、生徒たちとの会話部分もあり、決してスマホの危険性ばかりを強調しているわけではない。ネットトラブルも子どもの世界から解説しているところがあり、大人が読んでもなるほどと思うことが多く、十分参考になる一冊である。

■『不登校の理解と支援のためのハンドブック』　ミネルヴァ書房　(2022年8月初版発行)

編著者　伊藤美奈子：奈良女子大学生活環境科学系心身健康学科　臨床心理学コース教授、臨床心理士　公認心理師　京都大学大学院教育学研究科後期博士課程修了、主な著書に、『不登校－その心もようと支援の実際』(金子書房)等多数。

不登校児童生徒数が増加する中、学校、福祉現場、医療現場、適応指導教室、フリースクール等、それぞれの現場から見た不登校の実態や背景、支援状況等が詳しく述べられている。また、不登校特例校についても成り立ちや取組が説明されている。本市においても課題となっている不登校について、総合的に理解する上で、適した本であるといえる。

※教育総合センターには、すてきな本がたくさんあります。　（担当　西川）